

園藝教室の新築にあたり

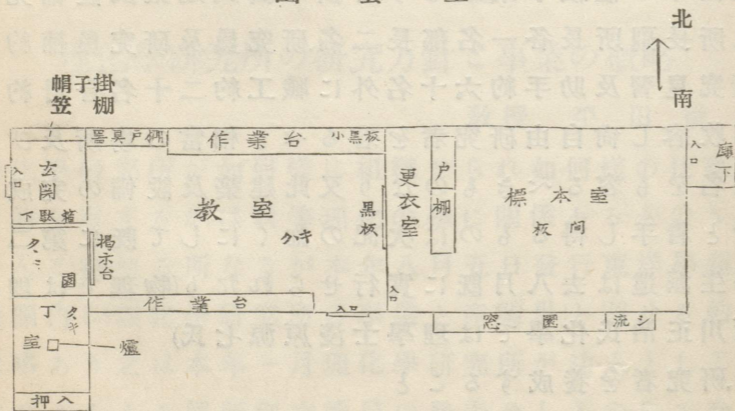
教授 有川ひさる

近年園藝が一般學校殊に女子の學校に認めらるゝに至り、母校に於ても先年來、實習地其他の設備に着手せられ、理科三四年に二時間、宛家事科四年に一時間、養成所に一時間を課することゝなりたるが、本年度には教室も新築せられ夏休み以來はこゝにて講義、室内作業等をも行ひ得るに至りたり。御披露かたがた御参考の一助にもと、いさゝか御紹介申すことゝせり。

(一) 建物計 三〇坪

内教室一二坪、教官兼標本室一二坪、玄関一、半坪、園丁室三坪、温室に至る廊下一半坪、

園藝室



(二) 設備及其目的

(1) 教室

一、床 タ、キとなし、實習後の掃除に便にす。

一、作業臺 室の南側及び北側の窓にそひ、巾二尺、高さ二尺二寸長さ各二間の臺を設く、鉢物の植ゑ更へ、手入れ等諸種の作業に用ひ、或は果物、蔬菜其他参考品の陳列に使用す。又、多人数の組の講義の時には生徒机に代用す。而して掃除を容易にし且つ汚れを防ぐに白木ニス塗り等何れも不便なるにより、厚き布地にペンキを塗りたる一種の蓋ひものをかくることゝせり。

一、土箱及び鉢場

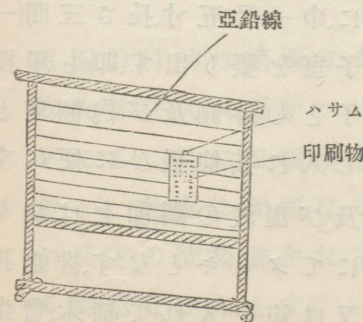
作業臺の下をしきりて砂、培養土、洗ひたる鉢等を準備し隨時鉢植に便にす。

一、器具戸棚

實習用具中特に使用の多きもの例へば、鋏、小刀の類、病害蟲防除の筆、藥劑等、其他、天秤、糸、紐等は、實習中にもよく生徒自ら出し入れに便なるやう、且つ整頓もしやすきやう、常に數量を限りてこゝに小出しになし置く、

揭示臺(他教室ノモノト同型)

幸ひ多くに區切りたる生徒の下駄箱を美しく塗り換へて代用するの便を得たり。



一、揭示臺

學科に關係ある諸種の新刊印刷物例は、雜誌、報告書の類、或は植物名鑑、繪、端書、寫眞の類等、生徒の隨時一覽し又は寫し取り置くべきものを揭示す。

一、小黑板

毎日の實習豫定を記入し、大抵二週間分を其まゝに置きて、生徒各自の日誌に記入しうるやうになす。

一、生徒用卓

巾三尺、長さ一間の大形卓を生徒八人一脚の割にて、四脚を備へ付く。講義の時の他は場所を明けるやう室の隅に重ねかたづくるに、大形の方便に、且つ講義中参考品を扱ふ等にも都合よし。一般に教室内の卓が成る可く便利に動かし得るやう構造を工夫し、且つ使用者もこれを動かすを勞とせぬやうにし、教室が經濟的に使用さるゝことは最注意すべきことかと思はる。

(口) 教官室兼標本室

一、更衣室

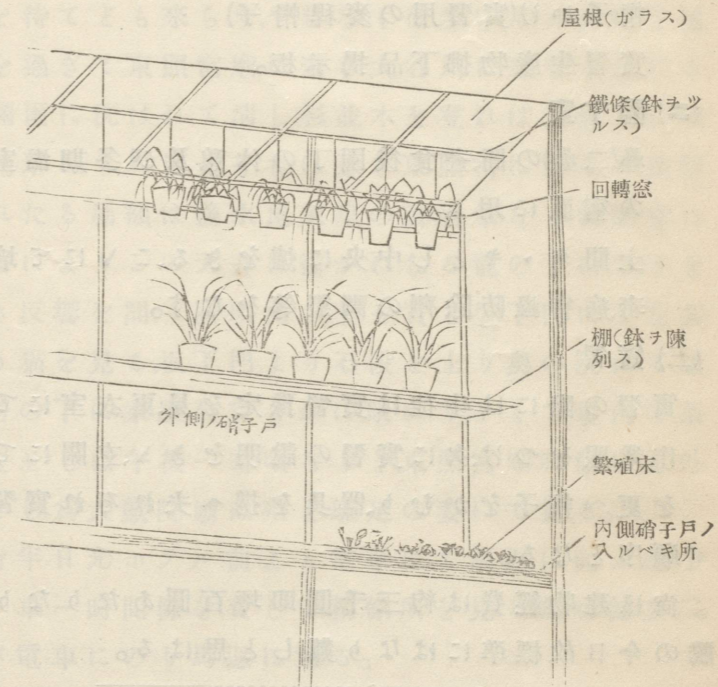
教室に接せる一部を戸棚を境としてしきり、更衣室とす、實習服かけ鏡、携帶品棚を設く。

一、窓園 window-garden

室の南側日あたりよき所に、巾一尺五寸、長さ三間(一部をしきりて流しとす)の硝子室を張り出す、即ち屋根及び左右内外方の四面を硝子とし、外側及び内側、室との境は硝子戸とす、植物の出し入れ、其他扱ひに便にす、屋根には回轉窓を設け、空氣及び温渡の調節をはかる。窓園の床は深さ四寸の框にてタ、キとなす、排水孔を數多設く。こゝに更に鉢又は箱を入れて挿木、實生等繁殖床に或は苗の仕立に用ふ。又棚、鐵條等を架して草花を陳列し又は懸垂して培養と同時に室の裝飾を

兼ねしむ。

窓園



窓園の目的は簡單なる温室の代用にて、冬期は夜中のみ火鉢を入れ鍋をかけて湯をわかし蓋をさりと蒸氣をたて、これにて温度を保ち且つ室内空氣の濕氣をはかる。此處に如何なる程度の植物までを培養し得るか、又どの位裝飾をたすけ得るか、是等は何れ實驗を経て御紹介せんとす。

此種の裝置は園藝室、理科室は勿論、職員室、生徒控室等の一部にも適宜試むるも興味あるならんと思ふ。

(八) 玄關

下駄箱(實習の際に使用する草履、足袋をおく)

帽子かけ(實習用の麥稈帽子)

實習生産物拂下品掲示板。

(二) 園丁室

疊(二疊)の間、晝食後園丁の休憩及び冬期温室をたく間の宿直に用ふ。

土間、タ、キとし中央に爐をきる、こゝにて培養土の消毒、病害蟲防除劑の調製等をなす。

(三) 實習

實習の際には生徒は實習豫定を見、更衣室にて袴を去り作業服をつけ、次に實習の説明をきき、玄關にてはきものを更へ帽子をかむり、器具を携へ夫れぞれ實習場に行く順序となる。

尙ほ建物經費は約三千圓即坪百圓あたりなり。物價暴騰の今日故標準にはなり難しと思はる。

日光足尾地方修學旅行記(其一)

理科三年(物化、專修科)

七月六日、金雨 上野より中禪寺湖に至る。

朝五時二十分上野發日光行に乗る、見渡す限り水田青々たる中を走る、利根の大河筑波の秀峯を賞で、ほどなく汽車は小山につきぬ、これよりは武藏野を後に刻々高臺となり秩父、榛名、赤城、那須等の諸山陣中に集る、先程より降り始めた雨、宇都宮より一層はげしくなりぬれば一行の眼は

外の景色をはなれて車内の談話に花咲きぬ。

午前九時三十分日光驛に下車、停車場内にて雨の仕度をなし、電車を待てども來らず、やむなく徒歩にて日光町を通り大谷川を過ぎて東照宮廟に至る大谷川に架せられたる神橋の朱欄雨に洗はれて清し、杉並木を登れば三佛堂に至る、近く相輪塔あり、馬場先を北に急ぎ東照宮に至る大鳥居に掲げられたる扁額、後水尾天皇の御親筆なり、樂師堂にて狩野安信によりこの天井に書かれたる龍の下にて手を打ち面白き反響を聞く、陽明門の美を賞し、坂下門にて左甚五郎の眠り猫を見る、坂下門より石段を上り奥の院にて唐銅製の寶塔の下に家康公安らかに眠れり、かくて境内の茶店にて中食せしは午後一時頃なりき、東照宮廟拜觀に意外の時を費せし爲大猷院廟は殆ど駈足の姿にて見る。

午後一時半日光ホテル前より電車にて馬返に向ふ途中清瀧にて下車一時間餘を費して精銅所を見る(旅行記其二A参照)再び電車にのり馬返に至る。

午後四時小荷物全部合力に渡し草鞋に襷がけの輕装にていよいよ雨上りの山路にさしかゝる、幸橋の邊景色極めて佳年若き畫家二人、人の來るも知らで寫生せり、大方秋の上野を飾る資ならん、中の茶屋にて般若、方等の二瀧を遠望し時移りたればとて舊道を行く、磁石岩を過ぎ不動坂を登り大平に着きしは暮色蒼然たる頃なりき、薄暗き樺の下道を通り華嚴瀧に行く、思ひしよりは小なり、宿より迎への提燈を便りに闇の夜道を狐の何やらの如き行列して中禪寺湖畔の宿に辿り着きしは午後七時半なりき。